

# Life Design Focus

## 高齢になっても勉強したい！

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 小谷 みどり

### <高い学習意欲>

筆者は、立教セカンドステージ大学の開設以来、死生学の講義を受け持っている。ここは、50歳以上を対象にした、学び直しと再チャレンジをサポートする学びの場だ。学生は、下は50歳から上は90歳までと年齢層が広い。毎日通学してくる学生は少なくないし、活発に議論をしたり、子や孫に近い若い学生と席を並べて受講したりと、イキイキと学ぶ姿に筆者は大きな刺激を受けている。

実際、高齢者の学習意欲は高い。文部科学省「学校基本調査」によれば、2015年5月段階で放送大学に57,850人が在学していたが、60歳以上が14,710人と全体の25%以上を占めていた。生涯学習という大きな枠で捉えても、内閣府の「教育・生涯学習に関する世論調査」によれば、60歳以上の半数近くがこの1年間に生涯学習をしていた（図表1）。なかでも「趣味的なもの」「教養的なもの」を挙げた人は、若い世代と比べると多かった（図表1）。

図表1 この1年間の生涯学習の実施状況

(単位:%)

	健康・スポーツ(健康法、医学、栄養、ジョギング、水泳など)	趣味的なもの(音楽、美術、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など)	職業において必要な知識・技能(仕事に関する知識の習得や資格の取得など)	教養的なもの(文学、歴史、科学、語学など)	家庭生活に役立つ技能(料理、洋裁、和裁、編み物など)	ボランティア活動のために必要な知識・技能	社会問題に関するもの(社会・時事、国際、環境など)	育児・教育(家庭教育、幼児教育、教育問題など)	就職や転職のために必要な知識・技能(就職や転職に関する知識の習得や資格の取得など)	自然体験や生活体験などの体験活動	情報通信分野の知識・技能(プログラムの使い方、ホームページの作り方など)	その他	生涯学習をしたことがない	わからない
20～29歳	23.6	14.6	26.4	8.3	13.2	0.7	7.6	7.6	13.2	2.1	4.9	-	41.0	-
30～39歳	18.6	12.7	17.7	7.3	8.2	1.8	6.4	7.7	6.8	5.9	5.9	-	52.7	0.5
40～49歳	19.1	11.9	14.5	5.9	6.6	5.0	1.3	6.9	4.6	6.9	2.6	-	56.8	-
50～59歳	21.3	17.9	16.7	9.9	3.8	6.5	6.8	4.6	7.6	3.4	5.3	0.4	52.1	-
60～69歳	23.7	24.6	6.3	10.2	9.3	12.6	5.1	3.0	0.9	4.2	1.8	0.9	52.4	0.3
70歳以上	20.3	24.9	2.8	10.8	7.5	6.7	8.0	1.8	1.3	2.6	1.8	1.0	53.0	0.3

注：調査対象者は全国20歳以上の日本国籍を有する者3,000人。  
資料：内閣府「教育・生涯学習に関する世論調査」2016年。

### ＜行政も生涯学習を推進＞

国も高齢者の生涯学習を積極的に推進している。1995年に施行された「高齢社会対策基本法」には、「国は、国民が生きがいを持って豊かな生活を営むことができるようにするため、生涯学習の機会を確保するよう必要な施策を講ずる」ことが規定されており、「国は、活力ある地域社会の形成を図るため、高齢者の社会的活動への参加を促進し、及びボランティア活動の基盤を整備するよう必要な施策を講ずるものとする」と定めている。

また文部科学省の「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」は、2012年に発表した報告書「長寿社会における生涯学習の在り方について」のなかで、健康管理、生きがいづくり、孤立を防ぐための人間関係のネットワークづくりが求められているなかで、高齢者がグループ活動や地域での社会参加等を通じて人間関係を構築していくことの必要性を指摘している。

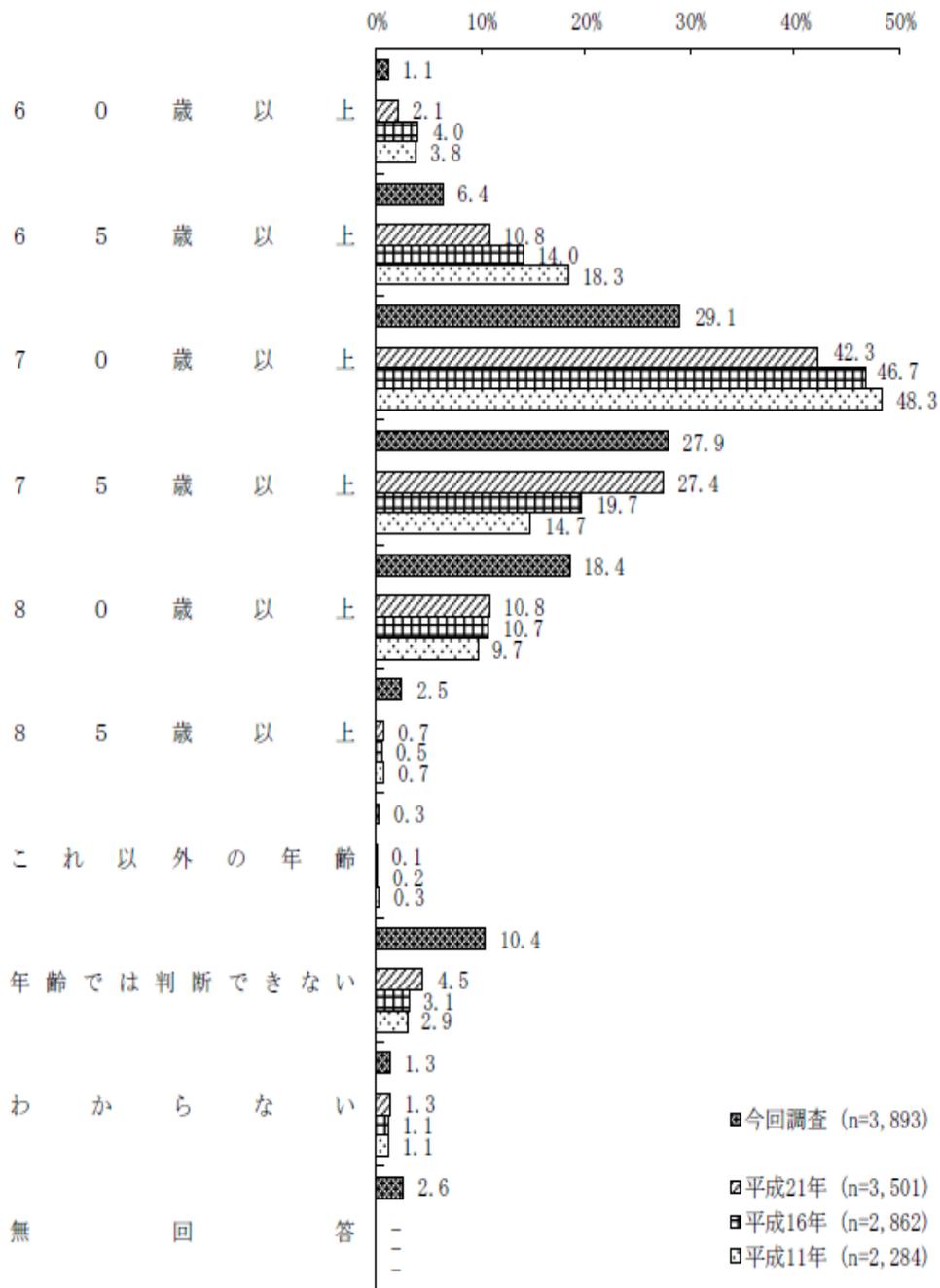
少子長寿社会にあつて、高齢者が高齢者を支える社会を目指し、高齢者自身が豊かな知識・経験を活かして地域社会の担い手として活躍することが期待されてきたという背景もある。自治体が運営している高齢者大学も、地域の担い手となる高齢者のための学習機関としての要素がある。自治体によって開設内容にばらつきがあるが、例えば「なかの生涯学習大学」は区の健康福祉課が管轄し、55～79歳の区民を対象に週に一度開講している3年間進級制の講座だが、「西宮宮水学園」は西宮市の生涯学習課が管轄し、60歳以上を対象とした原則月に一度開講される1年制の講座だ。

高齢者への役割期待の背景には、単に少子長寿社会であるという側面だけでなく、高齢者が精神的に若くなっているという側面もある。2014年に内閣府が実施した「高齢者の日常生活に関する意識調査」では、65歳から69歳の71.8%は、自分を高齢者だと感じていなかった。70歳から74歳でも、高齢者だと自覚する人が47.3%なのに対し、自覚しない人が48.2%と、高齢者と思わない人がわずかながら多かった。

また「高齢者とは何歳以上か」という質問には、「70歳以上」(29.1%)、「75歳以上」(27.9%)の割合が高く、少なくとも65歳以上を高齢者だと捉える人は6.4%しかいなかった(図表2)。過去の調査結果と比較すると、平成11年調査では高齢者を「70歳から」と捉える人が48.3%と半数近くいたが、年々、その割合が減少し、「75歳以上」と回答する人が増加しているなど、「高齢者とは何歳以上か」の年齢が年々上昇していることが分かる。

厚生労働省の発表によれば、2013年時点で、日常的に介護を必要としないで、自立した生活ができる期間を指す健康寿命は、男性が71.19歳、女性が74.21歳と推計されている。少なくとも60代は元気で、高齢者の自覚もない人が少なくないのだから、学び直しをして社会や地域に貢献したいと考える人は多いはずだ。高齢者が高齢者を支える時代の到来に向けて、高齢者の学習支援のあり方が注目される。

図表2 高齢者とは何歳以上か



注：調査対象者は60歳以上の全国の男女6,000人。平成21年調査までは調査員による面接聴取法、平成26年調査は郵送配布・郵送回収法と、調査方法は異なる。  
 資料：内閣府「高齢者の日常生活に関する意識調査」2014年。

(こたに みどり 主席研究員)